

せまがむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室

— 第二号 —
平成元年十二月一日

故郷を想う

福井幸平

故郷——である古平も、子ども

もの頃には想像もつかないほど現代化してきた。しかし、あの懐かしい自然や遊びは、いったいどこへいつてしまったんだろう。

そんな頃を思い出しながら、ペンをとってみました。

愛するふるさと——大正生まれの私でも、ずいぶんと長い時代を生かしてもらったと思う。そして、先輩からの影響をいちばん受けて成長したのではなからうか。ここに、明治・大正・昭和・平成と今もなお元気

でお暮らしの明治の大先輩に、心より尊敬と感謝を申し上げます。勿論、私を生んでくれた両親にも——。一人ひとり違った人生を乗り越えて、こよみの一枚一枚に、人それぞれの喜怒哀楽をにじませて参ったのでしよう。

——幼い頃は、どの道もデコボコ道、疋ぶきの低い家並、半鐘櫓のあった佐藤車屋、荷馬車が通っていた道路にはいつも馬糞が落ちていた。汽車や自動車は見たこともなかった。

夏は、すぐ前浜の①の浜で泳ぎまくった。毛がにもとれた。今とも言った田岸の浜は、一つ岩、二つ岩とも言って、ネグリツブがとれた。野村の浜、木工所の浜には、ノナ・ガンゼが多かった。ゴモクが多くてよく足を切ったりした。
この辺の浜は、コンブも多か

ったのか、浜辺でコンブを焼く臭いがしていた。

水眼鏡をつけて潜るのは少し後で、最初は水眼鏡なしで潜っては、手当りしだいにツブ・ノナ・ガンゼ・ナマコをとっていた。時々、ウミネズミとか言うナマコのでっかい奴がいて、触ると、紫色の煙幕を出して気持ちが悪かった。それと、クラゲ（デロレンと言ったが）が前浜一帯に浮いていて、チンチンを刺されて閉口した。

当時、一番記憶に残っているのは丑の日に、夜、海を泳ぐ習

今月の山来車事

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

- 古平町役場庁舎竣工（二年）
- 鉄道省で余市・余別間鉄道が予定路線に決定する（三年）
- 鉄興社が稲倉石鉾山を買収して操業開始する（四年）
- 定期船瑞広丸が座礁（十年）
- 信金より魚菜市场を古平漁協が譲り受け経営（一六年）
- 太平洋戦争が勃発（同年）

慣があったことだ。この日、うなぎを食べることは知らなかった。夜に浜へ行ってみると、沢江から新地方面の海岸まで、焚き火が点々と続いていた。その頃は、水泳禁止区域などは無かったようだし、また、子どもが溺れて死んだなどというようない記憶も無い。

海水パンツなどは無く、赤ふんどしか白ふんどしで、小さい子は丸出し……だった。
——以下次号——

- 戦時中金属が不足し学校で補助貨幣を回収する（十八年）
- 鮮魚介類の戦時中の統制が撤廃される（二十年）
- 余市保健所が設置され古平町を管轄する（二十年）
- 古平漁港の木造埠頭が漁協の拠出金で完成する（二九年）
- 古平水産加工協組の漁粕乾燥工場が完成する（同年）
- 古平中学校体育館と付属施設が完成する（三十年）
- 古平漁協が五十トン貯油タンクを設置する（三三年）

鯨のへ千石場所

そのもうけは？

古平は、その昔へ鯨の千石場所」と言われ、後志随一の繁栄を誇った時もあった。では、鯨千石でどれぐらいの金額になったものか、当時の資料をもとにして、現在といろいろ比較を試してみた。

手元にあるのは、沖村・田岸貞治氏の「入船町出張漁場」の記録（大正八年）である。

大正八年、古平町での鯨の総漁獲量は、四万四千五百石（三万三千四百トン）で、大正年間

の平均漁獲量を約一萬石も上回る大漁の年であった。
この年、入船出張漁場では建網一箇統で、「水揚杯数高」としてサンパ船で七十九杯五分、約八百石（六百トン）を漁獲している。そして、この漁獲量の販売による収入（製造品のみ）

は、合計二万五千九百七円であった。

そこで、単純に千石（七百五十トン）に換算してみると、三万二千三百八十四円となる。これは、一トン当たり約四十三円十七銭である。

現在、生鯨の相場は四十五万円（下山田水産・山田社長）という。これからみると鯨の価格は、約一萬倍になっていて、今の金額にすると、三億二千三百八十三万七千五百円ということになる。

昭和二年、町役場が建設費二万円余りで出来ている。今、一萬倍の二億円で出来るかと聞いてみたところ、

「まあ、出来るでしょう」という、福津組・三浦常務の答えでした。

してみると鯨のへ千石場所」と言われた当時の水揚高が、おおよそ、どれぐらいのものであったのかという見当がつく。

しかし、「買入物品支払帳」を見ると、女の出面が一日六十銭、清酒一升八十〜九十銭、米一俵（六十キロ）十六円八十九銭、但し、米はこの年の米騒動で、前年の二倍近くに高騰している。醤油一升六十銭、などである。

なにか、妙な計算をしました。どこかにマジックがありそうです。

支出についてはふれませんが、償却費を除いて、雇人の諸給与と物品購入費、その他で六千円ほどでした。

これらの詳細については、当時の漁場の経営を、知る貴重な資料ですので、後日、改めて述べてみたいと思います。

※丹後漁業で、大謀網に使用しているサンパ船が七トン内外（九石余り）なので、一杯を約十石とみています。

（町史編纂室・村井芳男）

- 古平商工会が設立（三四年）
- 古平町水道事業の経営が知事より認可される（三七年）
- 古平漁港灯台完成（三九年）
- 古平町名誉町民条例が制定される（四四年）

- 古平町内の漁船がスケソの新漁場を発見する（同年）
- 文化会館が完成し老人クラブ南寿会を結成する（四七年）
- 寄贈されたグランドピアノの披露演奏会を開催（同年）

古平造船所で作製した

北前船《辰悦丸》

写真を岩崎倉治さんが寄贈

昭和四十五年六月、「北方領土の返還」を願った北海道振興・久末鉄雄社長が、北前船の模型の作製を企図し、それを古平造船所に依頼したのである。

初めてのことであったが、永年の造船の技術と経験から、設計は岩崎倉治さん、製作にはその腕前をかわれて笹山徳市さん

幸幸幸幸幸幸幸幸幸幸幸幸

火渡り神事

幸幸幸幸幸幸幸幸幸幸幸幸

琴平神社宮司

山口 文彦

周りを取りまく数百人の観衆と、宵闇、これから始まるであろう火の饗宴を期待してどよめきが湧く中、白毛を植えた朱の面、朱の装束、右手に手鉾、左手に中啓を振りかざして、すつくと立ち上がり、辺りを睨み回す。紅く燃え上がる炎の光を浴びて、仁王様の如き姿である。

篝火の前に進み行き、右手の手鉾を正に空を切り、抜いの所作（しよさ）、燃え盛る篝火の中に手鉾を差し込んで安全を確かめる所作、後ろに退いていよいよ火渡り、力強い太鼓と笛の音、観衆のどよめきの中、二度三度と燃え盛る炎を掻き分けるように火渡り、火渡りするたびに夜空に舞い上がる火の粉と、

観衆のどよめきと拍手の中、御社へ一気に駆けあがる。

観衆の興奮冷めやらぬ間に、今度は、御神輿である。数十人の若者が昇ぎあげた金色に輝く御神輿、炎の衰えた篝火にカンナ屑が投げ入れられ、再び燃え盛る炎に向かって御神輿がワツシヨイ、ワツシヨイの掛け声諸共に突き進み、突き抜ける。炎に包まれて金色に輝く御神輿、夜空に舞い上がる火の粉、観衆の興奮も最高潮に達して、三度の火渡りを終えた御神輿も、御社目ざして一気に駆け上がる。

後に残された興奮も醒めやらぬ観衆は、炎の衰えた篝火によりやく火の饗宴の終わりに気付き、三々、五々家路につく。

このようなことなので、「古平祭り」が「火祭り」であるかの如き印象を与えているものと思われる。

又、このような過激な火渡りを行うようになったのは、神輿昇ぎの奉仕者が、「板子一枚下は地獄」と言われる危険な漁業に従事する若者達だったため、

罪穢れを抜い清める「火渡り」をすることによって、自分達の諸々の災厄もいっしょに抜い清めてもらい、安全に漁業に従事できるようにという、「願い」や「祈り」が籠められているものと思われる。

このような神事を行っているところは、道内では無いものと思われる。しかし、どこの神社でも例祭には、御神輿渡御をするところは多く、還御の際には参道の両側に篝火を焚き、その間を通り抜けることによつて、抜い清める神事としているところはあると思われる。

尚、篝火に焚く材料として、昭和二十三年までは、神社の真向かいで営業していた柵屋の主人が、一年間に出る柵屑を保管しておき、自分は篝火焚き役として、数十年にわたって奉仕された。

又、火渡りを行った翌朝、篝火の燃え残りを競い合うようにして拾い、家に持ち帰っては、入り口の鴨居に釘で打ちつけ、

（美国町）が当たった。費用は八十万円（船台、ケース共）、製作には約五箇月かかり、十月十一日に納品をした。模型の大きさは、船長約二メートルのものであったが、その資材の調達に苦労した。

船の底はヒノキ、外板は屋久島のスギ、舳にはケヤキ、その外も全てヒノキとスギであり、帆は、半纏の木綿地を使った。ロープや金具類に（次頁へ※）

災厄の家に入るのを防ぐ御守りとする慣習もあったが、現在のようにカンナ屑を使うようになったため、いつしかその慣習も薄れてしまった。

近年、祭典が近づくと、旅の人から「古平のお祭りは、火祭りなのですか？」というような照会が多々あり、地元の人にも、「火渡り神事」の真の意味がわからなくなつて来ているので、記録として書き残しておく必要を感じていたわけである。

日誌

名 達 文 吉

十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十

『九月十日、午前八時三十分
 大阪発車、伏見稲荷参詣、正午
 西宮着車、東本願寺あみだ堂前
 六条下数珠屋町、池田武兵衛殿
 方止宿、午後ヨリ十一日夕マデ
 東山参詣、十二日朝ヨリ夕迄、

いま手もとにある、何気なく残された一枚の文書も、私たちの歴史を語る貴重な財産なのです。

人力車ニテ西山参詣、十三日午
 前七時発車ニテ八幡宮へ参詣、
 八時五分ニ近江大津へ着車、
 小林亭へ休泊、三井寺、石山寺
 瀬田唐橋等寺ヲ参詣、午後四時
 五分車ニテ京都ニ帰、十四日発
 車、午前二大阪河繁ニ着、十六
 日天満天神宮ニ参詣、天王寺、
 住吉神社、難波屋ノ松堺区仮治

屋町ヨリ妙国寺へ参詣。

九月十七日、道頓堀中ノ芝居
 主従同道シテ見物致シ、十八日
 午後二時三十分汽車ニテ、主人
 ト先様妻、勇作殿三人、神戸へ
 向ケ出立ス、宿料十五円河繁へ
 払フ。

大阪ヨリ西宮間汽車四十銭、
 西宮ヨリ大津間汽車十五銭。

主人仲谷様、神戸ヨリ東京ヲ
 廻リソレヨリ帰国、十月三日小
 樽ニ着船ノ電報ヲ得タリ。

拙者、大阪同盟汽船会社無事
 丸ニテ、十月十三日午後六時江
 子嶋波止場出帆、神戸、備前岡

山、高松、丸亀寄港、四日午前
 六時多度津入港、ソレヨリ人力
 車ニテ、金刀比羅神社ニ至、五
 十丁程デ、三里往復六十銭、参
 詣帰り掛ケ、屏風ケ浦善通寺、
 弘法大師誕生処寄参、午後二時
 多度津ニ帰り、同社汽船備前丸
 二乗、十五日午前七時、大阪川
 口ニ入港。』 (以下次号)

※ も気を配るなど、苦心した
 という。

当初は、道庁二階に展示され
 ていたが、現在は、北海道開拓
 記念館・開拓村に展示されてい
 る。

今回寄贈になったのは、完成
 した時に撮影されたもので、文
 化会館内に掲示してありますの
 でご覧下さい。

ご寄贈戴きましたお礼をかね
 まして、ご紹介いたしました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
 十口平 鯨漁十熊

大正時代の末、古平の鯨漁華
 やかなころの写真集を複製しま
 した。十枚一組で五百円です。

ご希望の方は、町史編さん室
 へお申し込み下さい。

あとがき

先月創刊して、隔月
 に発行を予定していま
 したが、原稿も多く集
 まり、月刊にしたいと
 考えております。続け
 てご愛読下さい。 M